

文字の性質

人類は、このやうに言葉の力によって、万物の靈長となり得ましたが、先に書きましたやうに、言葉といふものは、発生するや否や消滅してしまひ、保存出来ないといふ欠点がありました。

この難題を完全に解決してくれたものが、“文字”でした。人類は遂に文字を発明したのです。その文字は、言葉を1語1語、視覚的符号として保存出来るやうに作られました。だから、これは“表語文字”と呼ばなければならないものです。従って、従来“表意文字”といふ呼称は誤りであることをここに明言しようと思ひます。

文字といふものは、言葉を表すために作られたものですから、当然“意味”も“発音”も共に兼ね備へてゐる、“表意兼表音文字”だったのです。これを“表意文字”と呼んだのでは、“非表音文字”だと誤解される恐れがあるのです。否、現にさう考へられてゐるのです。

繰返して言ひますが、文字は言葉を保存するために発明されたものです。ところが、欧米の学者たちは、^{ひと}皆しく「最初、文字は言葉とは別に、物そのもの、事それ自体を直接表すものとして作られた」と説いてゐます。さうなればこれは表語文字ではなくて“表意文字”といふ事になります。

然し、考へて頂きたいと思ひます。文字が物事それ自体を直接表すものとして作られたとしても、それを文字として人々の共通理解を得るためには、文字を「言葉を表した符号」として説明する以外に方法がないのです。

物事それ自体は言葉によって初めて表現されるものです。言葉を使はないで、どうして相手に“物事それ自体”を伝えることができますか。だから、「物事それ自体を直接表すものとして作った」としても、それは「言葉を表すものとして作った」といふ事になるのです。「文字が言葉とは別に作られた」とは何としても考へることが出来ないのです。

それにも拘らず、欧米の学者たちは、^{かた}頑なに「文字は物事それ自体を直接表すものとして作られた」と主張してゐるのです。それは何故でせうか。彼らが用ひてゐる“表音文字”が「世界で最も進歩した文字である」と主張するためには、最初の文字をどうしても“非表音”の“表意文字”としなければ、説明出来ないからなのです。

そこで我が国でも多くの人に読まれてゐると思はれるイギリスのムーア・ハウスの『文字の歴史』(岩波新書)に依つてその意図を明らかにしたいと思います。

第一章・第四部の「文字と言語」の中で、文字は「言語とは別に発生したものである」と述べ、更に「言葉と文字の間には何の連鎖も存在しな

かった」と念を押してみます。それが文字を使ってゐる間に言葉との連鎖が生じて来たのであるとして、「この連鎖こそ、文字の目的そのものを変化させ、文字をして音を表現させ、文字を変革させたのである」と述べてみます。

何といふ仰々しい表現でせう。「文字はもともと音を有たなかった。それが音を有つやうになったといふ事は文字にとって大変な飛躍なのである」といふこの主張は、「表意文字は原始的な文字であり、表音文字は進歩した文字である」と主張するためには無くてはならない前提条件だったのです。

そこでその考へ方がいかに誤つてゐるかを、別の面から明らかにしたいと思ひます。